

二三⑩ 駅路の鈴の声はよる山をすぐと云

三〇① 鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

こえこゑ (声々) (名)

八⑫ しつまり行声こゑも心すこく聞ゆ

こんげ (権化) (名)

三二⑨ 権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ

こんげん (権現) (名)

二八⑧ 権現垂跡のもとのけだかく

こんどう (金銅) (名)

三二⑤ 金銅十丈余の廬舎那仏なり

三二⑦ 金銅木像のかはりめこそあれども

水

ざ (座) (名)

三二⑨ 行法座をかさね

ざいぎやう (西行) (名)

六⑧ かの西行が道のへに……とよめるも

二二⑫ 西行修行のついでにみまいらせて

ざうばうたり (蒼茫) (形動)

一たり四二⑩ 草土ともに蒼茫たり

さか (坂) (名)

二⑬ あまたゝびゆきあふ坂の関水に 関

さかえ (栄) (名)

一⑤ 金帳七葉のさかへをこのまず

さかひ (境) (名)

一三⑫ 参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

三三⑩ 錦をきるさかひはもとより

さかひがは (境川) (名)

一三⑬ 岩瀬の波ことくしくきこゆ境川とぞ云

さき (崎) (名)

cf. くきが——す——みうらが——

さきのつかさ (前司) (名)

二二⑩ かの前の司も此召公の跡を追て

さきむら (鷲叢) (名)

八⑩ ねぐらあらそふ鷲むらのかずも

さざなみ (小波) (名)

三⑦ さゝ波や大津の宮のあれしより 関

ささはら (笹原) (名)

一一⑪ さゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて

さしあたりて (副)

二二① さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ

さしいづ (差出) (動下二)

一で四 一四④ 洲崎遠くさし出て松きびしく生つゞき

さしいる (差入) (動四)

一り四 八⑨ 杜の間より夕日のかげたえだえさし入て

一四⑫ 月のかげ曇なくさし入たる折しも

さして (副)

一一② さしていづこに住はつべしとも……さだめぬ

二〇〇⑨さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ  
さす(差・指)《動四》

cf. さを—

さすが《副》

三四③さすがなこりのおしき宿哉 歌

さそふ(誘)《動四》

—は困 一六③不断香の煙風にさそはれうちかほり

二三⑤風にさそはれて煙たなびけり

—ふ困 三一⑩風とこしなへに金磬のひびきをさそふ

さだかなり(定)《形動》

—に困 三③夜のうちなればさだかにも見わからず

さだまる(定)《動四》

—れ困 一三⑦さだまれることといひながら

さだむ(定)《動下二》

—め困 三二②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず

cf. おもひ—

さだめて(定)《副》

一二⑬さだめてたがはじとこそおほゆれ

さても《接》

一四⑪さても此宿に一夜とまりたりし

さと(里)《名》

四⑩行人もとまらぬ里となりしより 歌

八①里もひらくばかりにのゝしりあへり

一七⑩昨日の里の名残をそきく 歌

一九④いくほどもなく一村の里あり  
一九⑤此里のひがしのはてに

二〇⑫里にありて勤たるにまされるよし

二七⑥車返しと云里あり

cf. ふしみの—

さとびと(里人)《名》

四④北には里人住家をしめ

一三⑧住つきたる里人の今更るうかれんこそ

さぬきのほふわう(讃岐法皇)《名》

二二⑪讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

さねつな(実綱)《名》

二七⑭能因入道伊予守実綱が命によりて

さねまさ(実政)《名》

一一⑦学士実政任国に赴く時

さは(然)《連語》

四②朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覧 歌

さは《接》

二二⑩さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる

さびしさ(寂)《名》

三〇⑥さびしさは過こしかたの浦々も 歌

さへきる(遮)《動四》

—る困 二六⑤すべて孤嶋の眼に遮るなし

さま(状・様)《名》

四⑧とびちがふさまあしでをかけるやうなり

八⑩梢にきるるさま雪のつもれるやうに見えて

一九⑦とかく入ちがひたる様に

二一③思ひたえたるさまなり

二二①めいたつさまなる塚あり

三〇①旅店の都にことなるさまかはりて心すこし

cf. あり——おく——しも——

さます(醒)《動四》

—さ困 一四⑥夢をさますといふ事なし

さむし(寒)《形》

—く困 一九⑩旅ごろもうすき袂もさむくおぼゆ

二三⑩漁舟の火のかけは寒くして浪を焼

さむしろ(狭筵)《名》

二五①すその庵のさむしろに 歌

二七⑦床のさむしろもかけるばかりなり

さめがる(醒井)《名》

六④音にきしめが井を見れば

さやけさ(名)

三〇⑨波まより出たる月の影のさやけさ 歌

さゆ(牙)《動下一》

—ゆる困二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる

二五⑥牙る夜に誰こゝにしもふしわひて 歌

さよのなかやま(小夜中山)《名》

一八①小夜の中山は古今集の歌……とよまれたれば

一八⑦雲にあとふ佐夜の中山 歌

さらに(更)《副》

六⑧ものうくて更にいそがれず

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二四⑤こよひはさらにまどろむ間だになかりつる

さる(去)《動四》

—り困 九③尊は白鳥となりて去給ふ

一一⑤召公去にし跡までも

三〇⑩さりにし治承のすゑにあたりて

—る困 一六⑨舟のさること速なれば

さわぐ(騒)《動四》

—ぎ困 二六④むれたる鳥おほくさはざたり

さをさす(棹)《動四》

—し困 一七④あまの小舟に棹さしつゝ

二六③蘆かり小舟所々に棹さして

さんがに(三三)《連語》

三三②その功すでに三か二にをよぶ

さんくわんやてい(山館野亭)《名》

一⑬或は山館夜亭の夜のとまり

さんげつ(残月)《名》

二④遊子猶残月に行けん函谷の有様

さんこう(三公)《名》

一一①成王の三公として燕と云国をつかきつり

さんごや(三五夜)《名》

七⑩幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ

さんしゅん (三春) (《名》)

二〇⑭雲に入て猶三春の歳をとり

さんぜんり (三千里) (《名》)

三三①胡にいりし三千里のみちの思ひ

さんちゅう (山中) (《名》)

一〇②山中などをこえ過るほどに

一三⑫山中にこえかゝるほどに

さんりやく (三略) (《名》)

二二⑥武勇三略の名を得たり

し

し (詩) (《名》)

二二③生たりといへる詩思ひいでられて

しう (周) (《名》)

一一①召公奭は周の武王の弟也

しう (州) (《名》)

一一⑦州の民はたとひ甘菜の詠をなすとも

しうさう (繡草) (《名》)

一五⑤錦花繡草のたぐひは

しか (鹿) (《名》)

一八④雲に分入心地して鹿の音なみだをよほし

三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

しが (志賀) (《名》)

三⑧名のみ残れるしかのふる郷 歌

しかのみならず (連語)

三一⑩ひゞきをさそふしかのみならず代々の將軍以

下つくりそへられたる松の社

しがのこほり (志賀郡) (《名》)

三④近江の志賀の郡に都うつりありて

しかはあれども (接)

一⑥しかはあれどもみやまのおくの柴の庵までも

しばらく思ひやすらふ程なれば

一六⑩危き心ちすれしかはあれども人の心くらぶれ

はしづかなる流ぞかしとおもふにも

しき (四季) (《名》)

三一②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず

しきしゃう (職掌) (《名》)

三二②職掌に仰て八月の放生会をこなはる

しきりに (頻) (《副》)

一四⑤嵐しきりにむせぶ

三〇⑩恩賞しきりに隴山の跡をつぎて

しぐる (時雨) (《動下二》)

cf. うち——

しぐれわたる (時雨渡) (《動四》)

一り 六⑭山風松の梢に時雨わたりて日影もみえぬ木の

下道

しげし (繁・茂) (《形》)

一く 三⑭草の原露しげくして旅衣いつしか袖のしづく

ところせし

三二①松柏のみどりいよくしげく蘋蘩のそなへか  
くることなし

しづかなり(静)《形動》

しづかなり(静)《形動》  
一なる困二六⑬人の心にくらぶればしづかなる流ぞかしと  
しづく(雲)《名》  
四①旅衣いつしか袖のしづくところせし

しづまりゆく(静行)《動四》

しづまりゆく(静行)《動四》  
二四⑨ほすまもなき袖のしづくまでは

しげり(茂果)《動下二》

しど(志戸)《名》

しげる(茂・繁)《動四》

しのぐ(凌)《動四》

しり圃 一一⑦別路に茂りもはてゝ葛のはの 圃

しのはら(篠原)《名》

しれ圃 二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず

しのはら(篠原)《名》  
四④しの原と云所をみれば

しりて 一一⑩茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて

した(下)《名》

しのびやかなり(忍)《形動》

したくさ(下草)《名》

しのぶ(忍)《動四》

cf. この一

しのぶ(忍)《動四》  
一に圃 一四⑭晴天をみると忍びやかにうち詠じたりしこそ

したつゆ(下露)《名》

しのぶ(圃)《名》

六③名にしろいその杜の下草 圃

二一③分て色ある蒿のした露 圃

したみち(下道)《名》

しのみやがはら(四宮河原)《名》

二一⑩哀もふかし蒿のした道 圃

しちえふ(七葉)《名》

しづ(賤)《名》  
一⑤金帳七葉のさかへをこのまず

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ

しづ(賤)《名》

しば(柴)《名》

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ

しづ(賤)《名》

しづ(柴)《名》  
一⑥みやまのおくの柴の庵までも

二二②柴折くぶるなぐさめまでも思ひたえたるさまなり

しはし(暫)《副》

六⑨柳かけしはしとてこそたちとまりつれ 歌

六⑫しはしすゝまぬ旅人そなき 歌

一九⑨竜田川ならねどもしはしやすらはる

二三④過うくてしはしやすらへば

しはしば(屢)《副》

一⑪霧を分つゝしはしば前途の極なきにすゝむ

七⑩しはし幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ

しはらく(暫)《副》

一⑥庵までもしはらく思ひやすらふ程なれば

六⑦秋風にかくて暫忘れぬれば

じふくねん(十九年)《名》

三三①漢を別し十九年の旅の愁

しふくわつにじふさんにち(十月二十三日)《名》

三三⑭十月廿三日の晝

じふちやうよ(十丈余)《名》

三三⑤金銅十丈余の盧舎那仏なり

じふにろう(十二楼)《名》

三三④堂は又十二楼のかまへ望むにたかし

しほうみ(潮海)《名》

一四③南には潮海あり

一七④見めぐればしほ海湖の間に

しほかせ(潮風)《名》

一五⑦塩かせ梢に音信

しほひ(汐干・潮干)《名》

一〇①いそく汐干の道そくるしき 歌

二三④沖の石村々塩干にあらはれて

二四⑧いそく塩干のつたひみち

しはや(塩屋)《名》

二三⑤磯の塩屋ところゝ風にさそはれて煙たなび

けり

二六⑦原には塩屋の煙たえゝ立わたりて

しま(嶋)《名》

cf. うき——えの——つき——

しみづ(清水)《名》

六⑤いはねより流出る清水余り涼しきまですみわたりて

六⑨道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ

歌

六⑩道のへの木陰の清水むすふとて 歌

cf. せきの——

しむ(浸・染)《動四》

一四⑦夜ふくるままに身にしみて

一四⑥実身にしみばかりなり

しむ(占)《動下二》

一四⑥北には里人住家をしめ南には池のおもて遠く

一二②ひとつの甘菜のもとをしめて政ををこなふ時  
 一三⑬菅館をこの所にしめ仏神をそのみぎりに  
 一四⑭むる困二五⑮昔香爐峯の麓をしむる隠士あり  
 しめ(標)(《名》)

しも(霜)(《名》)  
 一〇⑩三嶋の社のみしめうちおがみ奉る

- 一①鬢の霜漸冷しといへども  
 一④首は霜ににたりと書給へる  
 五④朝つゆの霜にかはらん行するも  
 六②かはらしな我もとゆひに置霜も 國

しもざま(下様)(《名》)

一一⑪ましてしもざまのものは

じゃういき(浄域)(《名》)

一二⑫心を浄域の雲の外にすませる

じゃうきつさんねん(承久三年)(《名》)

一八⑧去にし承久三年の秋の比

じゃうぐん(將軍)(《名》)

二二⑫かの梶原は將軍二代の恩に橋り

三〇⑬隴山の跡をつぎて將軍のめしをえたり

三一⑭代々の將軍以下つくりそへられたる松の社蓬

の寺

じゃうごん(莊嚴)(《名》)

三一⑯楼台の莊嚴よりはじめて

じゃうじ(障子)(《名》)

七⑦ある家の障子に書つくるついでに

二四⑭ある家に立入たるに障子に物をかきたるをみ  
 れば

三三⑬宿の障子に書付

じゃうにん(上人)(《名》)

cf. ぢやうくわう——

じゃうむてんわう(聖武天皇)(《名》)

三二⑯彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作金銅十丈余  
 の盧舎那仏なり

じゃうど(浄土)(《名》)

二〇⑦阿弥陀仏をかけ奉て浄土の法もんなどをかけ  
 り

しゅうしん(崇神)(《名》) ↓すうしん

しゅぎやう(修行)(《名》)

二二⑫御跡を西行修行のついでにみまいらせて

しゆく(宿)(《名》)

四④この宿にこそとまりけるが

五⑤この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

一一②みやち山こえ過るほどに赤坂と云宿あり

一三③豊河と云宿の前をうち過に

一三⑤いまはその宿は人の家居を

一四⑭さても此宿に一夜とまりたりしやどあり

一五④此宿をもうち出て行過るほどに

一八⑩東へくだられけるに此宿にとまりけるが  
二四⑬神原といふ宿のまへをうちとをるほどに  
二九⑭此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
cf. かがみの——はしものと——ひがし——まへしま  
の——

しゆくす(宿)《動サ変》

—し(圃) 一八⑩東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふと

しゆくせい(叔齋)《名》

二〇⑭むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をと

り

しゅばいしん(朱賈臣)《名》

三三⑪よるこびは朱賈臣にあひにたるこちす

しゅやう(首陽)《名》

二〇⑭むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をと

り

しゅろうしでん(朱楼紫殿)《名》

二八⑨朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ

しゅうはく(松柏)《名》

三一①鶴岡の若宮は松栢のみどりいよくしげく

しよくしゃう(職掌)《名》 ↓しきしゃう

しらくも(白雲)《名》 二五⑬ふしのねの風にたよふ白雲を天津乙女の袖

かとぞみる 歌

しらなみ(白波)《名》

しらむ(白)《動四》

—み(圃) 一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれ

しらゆき(白雪)《名》

二五①つもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり

り

しる(知)《動四》

—ら(圃) 一⑩まだしらぬ道の空山かさなり江かさなりて

五⑤しらぬ翁のかけはみすとも 歌

七⑬しらさき秋の半の今宵しも 歌

八⑤花ならぬ色香もしらぬ市人の 歌

八①かずもしらず梢にさるさま

一五⑩いつのころよりとはしらず此原に木像の観音

おはします

二三⑫清見かた関とはしらて行人も 歌

三三①三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

しるし(験)《名》

一六⑦深き験の有と聞にも 歌

一七⑭ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまくな

る神のしるしを 歌

しるし(著)《形》

—き(圃) 二一④いはねどしるくみえて

—き(圃) 二五①つもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり



しるべ(導)(名)

歌

一一⑤まよひの心をしもしるべとし

一一⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれな

り

しるべす(動サ変)

―せ困 二八⑫うき身の行衛しるべせさせ給へなどのりて

しろし(白)(形)

―き困 八⑫遠く白きものから

しろたへ(白妙)(名)

二五⑨なべていまだ白妙にはあらず

しわざ(仕業)(名)

二五②心ありけるたび人のしわざにやあるらん

じんか(人家)(名)

一四③人家岸につらなれり

しんけん(神剣)(名)

九②此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

しんせん(神仙)(名)

二六⑨をのづから神仙のすみかにもやあらん

しんたん(震旦)(名)

三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ

しんでん(秦甸)(名)

一一⑫秦甸の一千余里を見わたしたらんこちして

す

す(為)(動サ変)

―せ困 二一⑩東路はこゝをせにせん宇津の山 歌

二一⑫我も又こゝをせにせんうつ山 歌

二二⑬なにゝかはせんとよめりけるなど 歌

―し困 五②老やしぬるといへるは 歌

一一⑩一千余里を見わたしたらんこちして

一八④雲に分入心地して

一九⑦すながしといふ物をしたるににたり

二〇④行者にとづてしけん程はいづくなるらんと

二四⑧かひなき心ちして

三〇③かくしつゝあかしくらすほどに

―す困 五⑧都にはいつしか引かへたるこちす

三三②三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

三三⑪朱買臣にあひにたるこちす

―する困 九⑦古郷にかへらんとする期いまだいくばくなら

す

二七⑩是そこのつりする海土の筈庇 歌

―すれ困 一六⑫おもひよせられていと危き心ちすれ

cf. ころろ―・しゅく―・しるべ―・とだえ―・ね

ん―・ほっしん―

すいじゃく(垂跡)(名)

二八⑨権現垂跡のもとるけだかくたふとし

すいしんじ (水心寺) (名)

二八⑩銭塘の水心寺ともいひつべし

すうしん (崇神) (名)

三一③崇神のいつくしみ本社にかはらす

すがた (姿) (名)

二五⑨天によれるすがた絵の山よりもこよなうみゆ

すぎ (杉) (名)

一八③北は深山にて松杉風はげしく

すぎうし (過憂) (形)

一く④清見が関も過うくてしばしやすらへば

一き④一四⑩わきて浜名の橋そ過うき ④

すぎがたし (過難) (形)

一し④一四④哀に思ひいでられて過がたし

すぎく (過來) (動カ変)

一こ④三〇⑥さひしさは過こしかたの浦々も ④

すぎむら (杉叢) (名)

五⑩おいその杜と云杉むらあり

すぎやうじゃ (修業者) (名)

二〇④かの業平がす行者にことづてしけん程は

すぎゆく (過行) (動四)

一き④三二⑭むなしく過行て秋より冬にもなりぬ

一く④一八⑥此山をもこえつゝ猶過行ほどに

すく (宿)

cf. いま——しゆく

すぐ (過) (動上二)

一き④二⑫関の清水を過ぎさせ給ふとて

一き④三②関山を過ぬれば

五④たちよらてけふは過なん鏡山 ④

二九④鴨臥房のよるのきゝにもすぎたり

三二①過にし延庇の比より

一く④一七⑩その御前をすぐとて

二三⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云唐の歌を

三二⑦かの大仏のなかげよりもすぐめり

一ぐれ④八①かやつ東宿の前を過れば

cf. うち——こえ——ゆき——

すぐす (過) (動四)

一し④二⑦嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

すぐる (勝) (動下二)

一れ④三一⑤二階堂はことにすぐれたる寺也

すこし (少) (副)

一四⑩すこしおとなびたるけはひにて

一九⑤此里のひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる

すこし (凄) (形)

二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

cf. ところ——

すさき (洲崎) (名)

四⑦洲崎所々に入ちがひて

一四④其間に洲崎遠くさし出て

一七⑤しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて

すざくてんわう(朱雀天皇)(名)

二三⑥むかし朱雀天皇の御時

すざのをのみこと(素盞鳥尊)(名)

八⑬此宮は素盞鳥尊なり

すさまじ(冷)(形)

一①じく困一九⑬風冷しく梢にひゞきわたりて

すず(鈴)(名)

二三⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云唐の歌を

すずし(冷・涼)(形)

一①し①鬢の霜漸冷しといへども

一き困 六⑤余り涼しきまですみわたりて

すずみあふ(涼合)(動四)

一①へ困 六⑥往還の旅人多く立よりてすゞみあへり

すすむ(進)(動四)

一①む① 一①②しばしば前途の極なきにすゝむ

すすむ(勉)(動下二)

一①め困 二九⑨いそぐ心にのみすゝめられて

一①め困 三二①関東のたかきやしきをすすめて

すずむ(涼)(動四)

一①ま困 六⑬しはしすゝまぬ旅人そなき 困

すずるなり(漫)(形動)

一①に困 九⑫旅の空のうれへすゞるに催して

すその(裾野)(名)

二四⑭旅衣すその庵のさむしろに 困

すだれ(簾)(名)

二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望げり

二九⑭行人征馬すだれのもとにゆきちがひ

すでに(已・既)(副)

九⑥吾願已にみちぬ

三二②その功すでに三か二にをよぶ

三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに

すつ(捨・棄)(動下二)

一①て困 一三⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ

すながし(洲流)(名)

一九⑦すながしといふ物をしたるににたり

すなはち(即)(副)

一①是即身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれ  
なり

三二④仏はすなはち両三年の功すみやかになり

すべて(凡)(副)

二六⑤すべて孤嶋の眼に遮るなし

すます(澄・清)(動四)

一①し困 二⑥常は琵琶をひきて心をすまし

一①せ困 二二④心を浄域の雲の外にすませる

すまひ(住居)(名)

二一⑦かゝる山辺の住居ならては 困

すまふ(住)《動四》

―ひ囲 一⑦都のほとりに住居つゝ

すみか(住家・栖・住処)《名》

一⑤たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ

二②東山の辺なる住家を出て

四④北には里人住家をしめ

一五⑧漁人釣客などの栖にやあるらん

二六⑨をのづから神仙のすみかにもやあらん

二七⑦網つりなどいとなむ賤しきもののすみかにや

すみつく(住着)《動四》

―き囲 一三⑧昔より住つきたる里人の今更るうかれんこそ

すみはつ(住果)《動下二》

―つ囲 一②さしていづこに住はつべしともおもひさだめ

ぬ

三三⑩つるにすみはつべきよすがもなき

すみやかなり(速)《形動》

―に囲 三三④仏はすなはち兩三年の功すみやかなになり

―なれ囲 一六⑨舟のさること速なれば

すみわたる(澄渡)《動四》

―り囲 六⑤余り涼しきまですみわたりて

―れ囲 七⑦照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

すむ(住)《動四》

―み囲 二二①許由が頰水の月にすみし

すむ(澄)《動四》

―み囲 二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ

するがのくに(駿河国)《名》

二三⑨駿河国きかはといふ所にてうたれにけりとき

ゝしが

す系(末)《名》

六⑦す系遠き道なれども

九④長保のす系にあたりて

一〇⑥明行末は波路なりけり 歌

一五⑧す系遠き野原なれば

二七④見渡せば千本の松の末遠み 歌

三〇⑩さりにし治承のす系にあたりて

せ

せ(瀬)《名》

一三⑩寛東ないさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわ

たりそめけん 歌

cf. いは―ふち―

せ(背)《名》

二二⑩東路はこゝをせにせん宇津の山 歌

二二⑫我も又こゝをせにせんうつ山 歌

せい(性)《名》

二〇⑩仏を念するに性ものうし

せいがん(西岸)《名》

一八⑩今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふ

と

せいさく (製作) (《名》)

三二⑤聖武天皇の製作金銅十丈余の盧舎那仏なり

せいてん (晴天) (《名》)

七⑦秋の景中の晴天清き河瀬にうつろひて

一四⑭夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかに

うち詠じたりしこそ

せいば (征馬) (《名》)

二九⑨行人征馬すだれのもとにゆきちがひ

せいわう (成王) (《名》)

一一①成王の三公として燕と云国をつかさどりき

せうこう (召公) (《名》)

一一⑤召公去にし跡までも

一一⑩かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ

一二⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん

せうこうせき (召公夷) (《名》)

一一①もろこしの召公夷は周の武王の弟也

せき (関) (《名》)

二⑤此関の辺にわらやの床を結びて

二⑧此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり

二三⑧此関にいたりてとどまりけるが

二三⑫清見かた関とはしらて行人も 関

二三⑭この関遠からぬほどに興津という浦あり

cf. あふさかの——きよみが——

せきかく (塞掛) (《動下二》)

一け関 二八④せきかけし苗代水の流きて 関

せきがん (石龕) (《名》)

二八⑧巖室石龕の波にのぞめるかげ

せきがん (石巖) (《名》)

三一⑦石巖のきびしきをきりて

せきのしみづ (関清水) (《名》)

一二⑫関の清水を過ぎせ給ふとて

せきみづ (関水) (《名》)

二⑬あまたゝひゆきあふ坂の関水に 関

せきや (関屋) (《名》)

cf. ふはの——

せきやま (関山) (《名》)

三②関山を過ぬれば

六⑬美濃国関山にもかゝりぬ

せたのながはし (瀬田長橋) (《名》)

三⑨せたの長橋うち渡すほどに

せみまる (蟬丸) (《名》)

二⑤むかし蟬丸といひける世捨人

二⑧蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに

せん (陝) (《名》)

一二②陝のにしのかたを治し時

ぜんそう (禅僧) (《名》)

三一⑧禅僧庵をならぶ

せんたう (錢塘) 《名》

二八⑩浅塘の水心寺ともいひつべし

せんちゆうのまつのもとさうほうのてら (千株松下雙峯寺) 《句》

二七①かの千株の松下雙峯寺一葉の舟中万里身とつ  
くれるに

せんど (先途) 《名》

一⑩しばしば前途の極なきにすむ

七⑩かつく遠情を先途一千里の雲にをくるなど

せんぼんのまつばら (千本松原) 《名》

二六⑬やがて此原につきて千本の松原といふ所あり

そ

そう (僧) 《名》

二〇⑦わづかなる草の庵のうちに独の僧あり

そこ (底) 《名》

六⑬谷川霧の底に音信

一六⑩をのづからくつがへりて底のみくづとなるた  
ぐひ

二二③身を孤山の嵐の底にやどして

そこら (副)

八①そこらの人あつまりて

そだつ (育) 《動下二》

一て圃 一二⑫国の民のごとくにおしみそだてて

そで (袖) 《名》

四①旅衣いつしか袖のしづくところせし

一七⑤南には極浦の波袖を湿し

二四④かけぬ浪にも袖はぬれけり 歌

二四⑨ほすまもなき袖のしづくまでは

二五⑭天津乙女の袖かそそみる 歌

二七⑪いとふありかや袖のこらん 歌

そなへ (備) 《名》

三一①瘰癧のそなへかくることなし

そとは (卒都婆) 《名》

二一⑧おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに

その (其) 《連語》

八⑭其後景行天皇の御代に

一〇⑨そのあたりをみれども

一一④人の発心する道その縁一にあらねども

一二③そのもとをうしなはず

一二⑥国民挙りて其徳政を忍ぶ故に

一二⑬その本意はさだめてたがはじとこそおほゆれ

一三②猶その陰を人やたのまん 歌

一三⑤いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつ  
すなどぞいふなる

一四④其間に洲崎遠くさし出て

一五⑦其間に松たえく生渡りて

一六②聞あへずその御堂へ参りたれば

一七⑩その御前をすぐとて

一八⑫いとあはれにて其家を尋るに

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二〇⑩其身堪たるかたなければ

二一⑪そのかたはらにかきつけし

三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

三二⑫そのほか由比の浦と云所に

三三⑬その功すでに三か二にをよぶ

三三⑬其こゝろのうち水ぐきのもとにもかきながし

がたし

そふ(添)(動下二)

cf. うへうへ——

そぶ(蘇武)(名)

三二⑭蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

そむ(染)(動下二)

一め圃

七⑨月のかげに筆を染つゝ

そむ(初)(動下二)

cf. わたり——

そもそも(抑)(接)

三〇⑩抑かまくらのはじめを申せば

そら(空)(名)

一⑩まだしらぬ道の空

二③駒引わたる望月の比も漸近き空なれば

三⑨曙の空になりて

五⑧眺の空にをこつれて

一〇③波も空もひとつにて

二三②あはれにも空にうかれし玉梓の 園

二四⑥寝覚ともなき眺の空に出ぬ

二六③山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

二六⑥わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむ

三三④一行の雁がね空に消ゆくも哀なり

cf. たびの——

それ(其)(名)

二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ

滝の音哉 園

た

だいのみや(第四宮)(名)

二⑧蟬丸は延喜第四の宮にておはしける

だいたい(代々)(名)

三一⑩しかのみならず代々の將軍以下つくりそへら

れたる

だいはんにゃ(大般若)(名)

九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける

だいぶつ(大仏)(名)

三一⑫阿弥陀仏の大仏をつくり奉る

三二⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり

だいまうじん(大明神)(名)

cf. みしまの——

だう(堂)《名》

三二④堂は又十二楼のかまへ望むにたかし

み—— 一五⑩御堂など朽あれにけるにやかりそめなる草の庵

たうか(唐家)《名》

二八⑩雲にかさなれる粧ひ唐家驪山宮かとおどろか

たうげ(峠)《名》

二二⑧此庵のあたり幾程遠からず峠と云所にいたり

たうこく(当国)《名》

九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りける

だうしゃ(堂舎)《名》

三二②仏像をつくり堂舎を建たり

だうしん(道心)《名》

二〇⑨さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ

たうせんこりう(陶潜五柳)

一⑤ただ陶潜五柳のすみかをもとむ

だうぢやう(道場)《名》

三二⑧道場のあらたなるをひらきしより

たえだえ(絶々)《副》

八⑧夕日のかげたえだえさし入て

一五⑦其間に松たえく生渡りて

たかし(高)《形》

二六⑦原には塩屋の煙たえく立わたりて

—— 二二⑭ある木陰に石をたかくつみあげて

二八⑦岩がねたかくかさなりて

二九③岩瀬の波高くむせぶ

三二②鳥愁たかくあらはれて半天の雲にいり

—— 一四①音もたかしの山にきにけり 〔歌〕

三二⑤十二楼のかまへ望むにたかし

—— 一き困 三二①延応の比より関東のたかきいやしきをすすめ

たかしのやま(高師山)《名》

一三⑩参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

一四①駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり

たかね(高嶺)《名》

二五⑦高ねの雪を思ひやりけん 〔歌〕

cf. ふじの——

たがふ(違)《動四》

—— 一は困 一一⑬その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ

たき(滝)《名》

二九⑤涙もよほす滝のをとかなといへる

二九⑦夢路ゆるさぬ滝の音哉 〔歌〕

たぐひ(類・比)《名》

四⑩今はうちすぐるたぐひのみ多くして



八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づと

一四⑥とまるたぐひ夢をさまさず

一五⑥綿花繡草のたぐひはいともみえず

一六⑥底のみくづとなるたぐひ多かり

一七②人の心のたくひとは見す 國

たぐひなし (類無) (形)

一き困 三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像

たけ(丈) (名)

おん——三二⑦阿弥陀は八丈の御長なれば

たけし(猛) (形)

一き困 三〇⑨九の世のはつえをたけき人にうけたり

たこのうら (田子浦) (名)

二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねをみれば

ただ(直・唯・只) (副)

一⑤たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ

七②荒にしのちはたゞ秋の風とよませ給へる

三二⑬日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

たたふ(濫) (動四)

一へ困 二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたゞへり

ただふみ (忠文) (名)

二三⑧民部卿忠文をつかはしける

ただよふ (漂) (動四)

一ふ困 二五⑬ふしのねの風にたゞよふ白雲の 國

たちいづ(立出) (動下二)

一で困 七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば

九⑩この宮をたち出浜路におもむくほどに

二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに

たちいる(立入) (動四)

一り困 二四⑭まちつげんとてある家に立入たるに

たちさる(立去) (動四)

一ら困 六⑧立さらん事はものうくて更にいそがれず

たちとまる(立留) (動四)

一り困 六⑨しはしとてこそたちとまりつれとよめるも 國

たちまちに(忽) (副)

二二⑧たちまちに身をほろぼすべきになりければ

二八②たちまちに緑にかへりけるあら人神の御なご

りなれば

たちよる(立寄) (動四)

一ら困 五④たちよらてけふは過なん鏡山 國

一り困 五①鏡山いさたちよりてみてゆかむ 國

六⑨往還の旅人多く立よりてすゞみあへり

一九⑬かた山の松のかけに立よりて

たちわたる(立渡) (動四)

一り困 二③秋ぎり立わたりてふかき夜の月かげほのかな

り

たつ(立) (動四)

二六⑦原には塩屋の煙たえど立わたりて

―ち囿 六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝ

りぬ

一九⑫まへ嶋の宿をたちて

二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた

三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに

―つ囿 一四⑭目にたつ所々心とまるふしどく

四⑨都をたつ旅人この宿にこそとまりけるが

一四⑦朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし

二一⑭めにたつさまなる塚あり

たつ(立・建) (動下二)

―て囿 二〇⑤道のほとりに札をたてたるをみれば

二一②殊更煙たてたるよすがもみえず

三二②仏像をつくり堂舎を建たり

―つる囿 一六⑥たのもしな入江に立るみをつくし 囿

たつたがは(竜田川) (名)

一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ龍田川ならねど

も

たづぬ(尋) (動下二)

―ぬる囿 一八⑫いとあはれにて其家を尋るに

三一⑭事のおこりをたづぬるに

―ぬれ囿 二二①人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ

たづねきく(尋聞) (動四)

―け囿 二〇⑧発心のはじめを尋きけば

たてまつる(奉) (動四)

―り囿 二八①命によりて歌よみて奉りけるに

―る囿 二八⑫いのりて法施奉るついでに

たてまつる(奉) (補動四)

―り囿 二〇⑦画像の阿弥陀仏をかけ奉て

―る囿 二七⑭三嶋大明神をうつし奉ると聞にも

―る囿 八⑧やがてまいりておがみ奉るに

九②本体は草薙と号し奉る神剣也

二七⑫三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに

三〇⑭仏像をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

三一⑫大仏をつくり奉るよしかたる人あり

たとひ(縦・仮令) (副)

一二⑦州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝこ

となかれ

たとふ(譬) (動下二)

―ふ囿 一六⑬たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき

習ひ也

たなびく(動四)

―け囿 二三⑤風にさそはれて煙たなびけり

たに(谷) (名)

一八③谷より嶺にうつるみち

たにがは(谷川) (名)

六⑬谷川霧の底に音信山風松の梢に時雨わたりて

一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことどしくきこ

ゆ

一三⑭ 岩つたたび駒うち渡す谷川の音もたかしの山に  
きにけり 歌

二九⑨ 太山おろしはげしくうちしぐれて谷川みなぎ  
りまさり

たのみ(頼)(名)

二九⑥ 夫ならぬたのみはなきを古郷の 歌

たのむ(頼)(動四)

—ま困 二二⑬ 行すゑのかげとたのまむこと

一三② 猶その陰を人やたのまん 歌

—む困 一一⑬ 柳もいまだ陰とたのむまではなければども

一七⑬ ゆふたすきかけてそ頼む今思ふ 歌

二〇① 是そこのたのむ木のもと岡へなる松の風に心  
してふけ 歌

三三⑥ かへるへき春をたのむの雁かねも 歌

たのむ(田面)(連語)

(三三⑥) かへるへき春をたのむの雁かねも 歌

たのもし(頼)(形)

—しく困 一六⑤ うみのごとしといへるもたのもしくおぼえて

—し困 一六⑥ たのもしな入江に立るみをつくし 歌

たび(度)(名)

cf. あまた—

たび(旅)(名)

—⑪ はるく遠き旅なれども

七⑧ 旅のおもひいとをさへがたく

一九⑩ 日数ふる旅のあはれは大井河 歌

三三① 蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

たびごろも(旅衣)(名)

四① 旅衣いつしか袖のしづくところせし

一九⑭ 夏のまゝなる旅ごろもうすき袂もさむくおほ

二四⑭ 旅衣すそのの庵のさむしろに 歌

たびね(旅寝)(名)

七⑭ かゝる旅ねの月をみるとは 歌

一四⑨ 行とまる旅ねはいつもかはらねと 歌

二七⑧ かの縛戎人の夜半の旅ねも

たびのそら(旅空)(連語)

五⑨ 行末とをきたびの空

九⑫ 旅の空のうれへすゞるに催して

二四⑨ かけてもおもはざりし旅の空ぞかし

三三⑦ なきてや旅の空に出にし 歌

たびびと(旅人)(名)

四⑨ 都をたつ旅人

六⑥ 往還の旅人多く立よりてすゞみあへり

六⑫ しはしすまぬ旅人そなき 歌

一三⑤ 今道と云かたに旅人おほくかゝる間

一五⑨ うちつれたる旅人のかたるをきくに

一六⑨ 往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

二二⑤ 心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ

たびまくら (旅枕) (名)  
二五②心ありけるたび人のしわざにやあるらん

たひらく (平) (動下二)  
二四③清見かた磯へに近きたひ枕 歌

一げ困 二三⑦是をたひらげんために民部卿忠文をつかはしける

一げ困 九②夷をたいらげて帰り給ふ時  
たふ (堪) (動下二)

一へ困 二〇⑩其身堪たるかたなければ  
たふとし (尊・貴) (形)

一く困 三一⑬たふとくありがたし  
一し困 二八⑨権現垂跡のもとるけだかくたふとし

たまがき (玉垣) (名)  
八⑨あけの玉垣色をかへたるに

たまくしげ (玉櫛笥) (枕詞)  
一〇⑤玉くしげ二村山のほのくくと 歌

たまのとこ (玉床) (連語)  
二三⑬よしや君昔の玉の床とても 歌

たまふ (給・賜) (動四)  
一は困 一二⑨御製をたまはせたりけるも此ところのや有けん

たまふ (給) (補助四)

一ひ困 二⑬よませ給ひける御歌  
二二⑪讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

一ふ困 二⑫関の清水を過ぎせ給ふとて

九③尊は白鳥となりて去給ふ  
九③剣は熱田にとまり給ふともいへり

一ふ困 九③夷をたいらげて帰り給ふ時  
三〇⑩故右大將家と聞え給ふ水の尾の御門の九の世のはつえをたけき人にうけたり

一へ困 一④首は霜ににたりと書給へる  
七②たゝ秋の風とよませ給へる歌

九①景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりといへり

二二②顕基中納言の口ずさみ給へりけん  
二八⑫うき身の行衛するべさせ給へなどのりて

たまほこの (玉梓) (枕詞)  
二三②あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも  
名をとゝめけり 歌

たまよする (玉寄) (連語)  
二〇⑧玉よする三浦かさきの波まより 歌

たまる (溜) (動四)  
一ら困 一五⑫庵のうちに雨露もたまらず年月を送るほどに

たみ (民) (名)  
一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたるまで

一二⑦州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ

cf. くにの――

たむけおく(手向置)(動)

―か困 九⑩法の形見をたむけをかすは 𠮟

ため(為)(名)

一八⑩火のためにやけて

二三⑦是をたひらげんために民部卿忠文をつかはし

ける

たもと(袂)(名)

四③袂にかゝるはしめ成覧 𠮟

一九⑭旅ごろもうすき袂もさむくおぼゆ

たやすし(容・易)

―く困 一六⑨往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

たゆ(絶)(動下二)

―え困 二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず

cf. おもひ――

たより(便)(名)

一一⑭古武藏の前司道のたよりの輩に仰て

二八①うれしき便なれば

たる(垂)(動下二)

―れ困 九①景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりと

いへり

たれ(誰)(名)

一九③跡は千年と誰かいひ剣 𠮟

二五⑥冴る夜に誰こゝにしもふしわひて 𠮟

だんせつ(团雪)(名)

六⑦班婕妤が团雪の扇秋風にかけて暫忘れぬれば

ち

ち(地)(名)

三〇⑭今繁昌の地となれり

ちかごろ(近比)(名)

一三④近比より俄にわたふ津の今道と云かたに旅人

おほくかゝる間

ちかし(近)(形)

―く困 二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

―し困 一五⑥西は海の渚近し

―き困 二③望月の比も漸近き空なれば

五⑧枕にちかきかねの声

二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

二四③清見かた磯へに近きたひ枕 𠮟

―けれ困 八⑦神垣のあたりちかければ

ちかづく(近)(動四)

―き困 一①齡は百とせの半に近づきて

ちがふ(違)(動四)

cf. いらり――とび――ゆき――

ちから(力)(名)

三二⑨権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ

ぢしゃう(治承)(名)

三〇⑪きりにし治承のすゑにあたりて  
ちとせ(千年)《名》

一九③跡は千年と誰かといひ劍 國  
ちどり(千鳥)《名》

cf. ともなし—  
ちもと(千本)《名》

二七④見渡せば千本の松の末遠み 國  
ちやうくわうしやうにん(定光上人)《名》

三一⑭本は遠江の国の人定光上人といふ  
ちやうぐわばう(暢臥房)《名》

二九③暢臥房のよるのきゝにもすぎたり  
ちやうしよう(長松)《名》

一七⑤北には長松の風心をいたしましたむ  
ちやうほ(長保)《名》

九④長保のすゑにあたりて  
ちゆうしう(中秋)《名》

七⑩幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ  
ちゆうなごん(中納言)《名》

cf. あきもとの—・なかみかどの—  
ちようくわんじふしちねん(貞観十七年)

二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて  
つ

ついで(次・序)《名》

七⑫ある家の障子に書つくるついでに

二二⑫御跡を西行修行のついでにみまいらせて  
二八⑫法施奉るついでに

つか(塚)《名》  
二二①めにたつさまなる塚あり  
二二④是も又ふるきつかとなりなば

つかさ(司)《名》  
二三⑨軍監と云つかさにて行けるが

cf. さきの—  
つかさどる(司)《動四》  
一り圍 一二①成王の三公として燕と云国をつかさどりき

つかさひと(官人)《名》  
一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたる  
まで

つかはす(遣)《動四》  
一し圍 一〇⑬とまりける女のもとにつかはしける歌に

二三⑧民部卿忠文をつかはしける  
つき(月)《名》

七⑨月のかげに筆を染つゝ  
七⑩幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ

七⑭かゝる旅ねの月をみるとは 國  
一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

一四⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも  
一五⑬月のかつらの色にみえにき 國

二一①許由が潁水の月にすみし

三〇⑨波まより出たる月の影のさやけさ 〇

三一⑧月をのづから祇宗の観をとぶらひ

cf. とし——もち——

つきかげ(月影)《名》

二③ふかき夜の月かげほのかなり

九⑩有明の月かげふけて

つきがたし(着難)《形》

一し⑩往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

つきしま(築嶋)《名》

三〇④和賀江のつき嶋

つきなみ(月次・月並)《名》

七⑦照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

つきひ(月日)《名》

六①はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ

つく(付・着)《動四》

一き⑦遠江の国府いまの浦につきぬ

二〇⑬ある人のをしへにつきて

二八⑦菅根の山にもつきにけり

一く⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ

二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた

cf. くだり——すみ——ゆき——

つく(盡)《動上二》

一き⑥余熱いまだつきざる程なれば

つく(付・着)《動下二》

cf. かき——な——まち——むすび——

つく(次・継)《動四》

一き⑨やがて此原につきて千本の松原といふ所あり

三〇⑬恩賞しきりに隴山の跡をつきて

つくしびと(筑紫人)《名》

一五⑬鎌倉へくだる筑紫人有けり

つくづく(熟)《副》

一五⑨すゑ遠き野原なればつくづくとながめゆく

三三④つくづくと都のかたをながめやる折しも

つくりそふ(造添)《動下二》

一へ⑩代々の將軍以下つくりそへられたる松の社蓬

の寺

つくる(作・造)《動四》

一ら④大津の宮をつくられけるときくにも

一り⑥彼木を敬て敢てきらざうたをなんつくりけり

一六①御堂を造けるより

三一⑫阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよしかたる人あ

り

三二②仏像をつくり堂舎を建たり

一る④古郷へむかはゞ御堂をつくるべきよし

一れ②一葉の舟中万里身とつくれるに

つた(薦)《名》

二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず

一一〇宇津の山哀もふかし萬のした道 國  
一一一うつの山分て色ある萬のした露 國

つたひ (伝) (名)

cf. いは

つたひみち (伝道) (名)

二四〇いそぐ塩干のつたひみちかひなき心ちして

つち (土) (名)

一一〇一千余里を見わたしたらんこゝちして草土と  
もに蒼茫たり

一一二道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも

つづく (続) (動四)

一〇四波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに

見ゆ

一〇四波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに

國

cf. おひ

つづく (続) (動下二)

cf. おもひ

つつみ (堤) (名)

四四しの原と云所をみれば西東へ遥にながき堤あり

つとむ (動) (動下二)

一〇四山の中の眠れるは里にありて勤たるにまされるよし

るよし

つね (常) (名)

二〇六わらやの床を結びて常は琵琶をひきて心をすまし

つひに (終) (副)

一一〇終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間  
三二〇文にもくらく武にもかけてつゝにすみはつべき  
きよすがもなきかずならぬ身なれば

つみ (罪) (名)

一一四あまねく又人の患をことはりおもき罪をもなだめけり

一八〇中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へ

くだられけるに

つみあぐ (積上) (動下二)

一〇四ある木陰に石をたかくつみあげてめにたつさまなり

まなり

つもる (積) (動四)

一〇四さむしろにつもるもしるきふしのしら雪 國

一〇四梢にきあるさま雪のつもれるやうに見えて

一五七白き真砂のみありて雪の積れるに似たり

つゆ (露) (名)

三〇四草の原露しげくして

一〇四涙のかたみや稲葉の露を残しをくらん 國

一五〇かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまたらず

一六〇あかの花も露鮮なり



一八③南は野山にて秋の花露しげし

cf. あさき——した——

つらなる(連)《動四》

一れ罫

一⑧人並に世にふる道になんつらなれり

一四④北には湖水有人家岸につらなれり

二六⑥わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむ

つり(釣)《名》

二七⑥或家にやどりたれば網つりなどいとなむ賤し

きものすみかにや

二七⑩是そこのつりする海士の咎庇 歌

つりぶね(釣舟)《名》

三〇⑦ひとつなかめの沖のつり舟 歌

つる(連)《動下一》

cf. うち——

つるがをか(鶴筒)《名》

三一①中にも鶴岡の若宮は松柏のみどりいよいよし

びく

つるぎ(剣)《名》

九③剣は熱田にとまり給ふともいへり

つれづれ(徒然)《名》

三〇③あかしくらすほどにつれぐもなぐさむやと

て

て

て(手)《名》

八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家つとも

てうかく(釣客)《名》

一五⑧庵所々みゆる漁人釣客などの栖にやあるらん

てうし(朝市)《名》

一⑧是即身は朝市にありて

てうてき(朝敵)《名》

三〇⑩義兵をあげて朝敵をなびかすより

てうばう(眺望)《名》

二六⑥こなたかなたの眺望いづれもとりくくに心は

そし

二七②眺望いづくにもまさりたり

三〇④浦々を行てみれば海上の眺望哀を催して

てら(寺)《名》

三一⑤二階堂はことにすぐれたる寺也

三一⑪つくりそへられたる松の杜蓬の寺まぢまぢに

これおほし

てる(照)《動四》

一る 照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

てん(天)《名》

二五⑨なべていまだ白妙にはあらず青して天によれ

るすがた

てんぢく (天竺) (名) 二八①炎旱の天よりあめにはかにふりて

三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ

てんぢてんわう (天智天皇) (名)

三③昔天智天皇の御代大和国飛鳥の岡本の宮より

てんりゅう (天竜) (名)

一六⑧天龍と名付たるわたりあり

てんわう (天皇) (名)

cf. けいかう——ごさんでう——しゃうむ——すぎく  
——てんぢ——

と

とうかいだう (東海道) (名)

一八⑩今は東海道の菊川西岸に宿して

とうぐう (東宮) (名)

一二⑥後三条天皇東宮にておはしましけるに

とうさんでうめん (東三条院) (名)

二⑫東三条院石山に詣て還御ありけるに

とうだいじ (東大寺) (名)

三二⑥彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作

とかく (副)

一九⑦流わかれたる川瀬どもとかく入ちがひたる様

にて

とき (時) (名)

九③夷をたいらげて帰り給ふ時尊は白鳥となりて  
一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける時とまり  
ける女のもとにつかはしける歌

二二②陝のにしのかたを治し時ひとつの甘菜のもと  
をしめて

一一③政ををこなふ時つかさ人よりはじめて

一一⑦学士実政任国に赴く時州の民は

一六⑩此河みづまされる時ふねなどもをのづからく  
つがへりて

二五⑧ふじの高ねを見れば時わかぬゆきなれども

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

二三⑥むかし朱雀天皇の御時

おん——

ときどき (時々) (副)

九⑫友なし千鳥ときくををつれわたれる

とぐ (遂) (動下二)

一げ團 九⑥大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に

とくせい (徳政) (名)

一五⑭もしこの本意をとけて古郷へむかはゞ

一一⑥国民挙りて其徳政を忍ぶ故に

とこ (床) (名)

二⑥此関の辺にわらやの床を結びて

二⑩いにしへのわらやの床のあたり迄

五⑦まばらなるとこの秋かぜ夜ふくるままに

五⑫かたしきわひぬ床の秋風

五⑫かたしきわひぬ床の秋風

五⑫かたしきわひぬ床の秋風

一四⑭夜もすがら床の下に晴天をみると  
二七⑰夜のやどりありかことにして床のさむしろも  
かけるばかりなり

cf. たまの——

とこ(鳥籠)《名》

(五⑦)まばらなるとこの秋かせ夜ふくるままに

(五⑫)かたしきわひぬ床の秋風

とこしなへに(永久)《副》

三一⑨行法座をかさね風とこしなへに金磬のひゞき

をさそふ

ところ(所・処)《名》

三⑭野路と云所にいたりぬ

四④しの原と云所をみれば西東へ遙にながき堤あ

り

五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ

六⑩たちとまりつれとよめるもかやうの所にや

六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝ

りぬ

七⑥くみぜ川と云所にとまりて

一〇⑧なみだおとしける所よとおもひ出られて

一一②やはぎといふ所をいでて

一四②橋本と云所に行つきぬれば

一五⑤まひぎはの原と云所に来にけり

一八⑧菊川といふ所あり

二一⑧峠と云所にいたりて

二二⑩駿河国きかはといふ所にてうたれにけりと

二二⑫かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける

二六⑬千本の松原といふ所あり

二九②此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば

二九⑫なにがしのいりとかやいふ所に

三〇⑬管館をこの所にしめ仏神をそのみぎりに

三一⑫由比の浦と云所に阿弥陀仏の大仏を

三三⑩もとよりのぞむ処にあらねども

cf. ところ——

ところせし(所狭)《形》

一し四 四①旅衣いつしか袖のしづくところせし

ところどころ(所々・処々)

一⑭目にたつ所々心とまるふしづくを

四⑦洲崎所々に入ちがひてあしかつみなどおひわ

たれる中に

一四⑪軒ふりたるわらやのところくまばらなる

一五⑧あやしの草の庵所々みゆる

二三⑤磯の塩屋ところく風にさそはれて

二六③蘆かり小舟所々に棹さして

二九⑩大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々をも

三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずお

ぼゆ

とし(年)《名》

五①年へぬる身は老やしぬるといへるは 𠄎

七④萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも

八⑧木立年ふりたる杜の木の間より夕日のかげ

一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を

二二⑨おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに

としつき(年月)(名)

一五⑫雨露もたまらず年月を送るほどに

二〇⑬あまたの年月ををくるよしをこたふ

としどしに(年々)(連語)

二二⑨年々に春の草のみ生たりといへる

とたえす(絶)(動サ変)

一し圃 一八⑥踏かよふ峯の梯とたえして雲にあとふ佐夜

とどまる(留)(動四)

一り圃 一七③爰に宿かりて一日二日とどまりたるほど

二三⑧此関にいたりてとどまりけるが

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとどまりぬ

とどむ(留)(動下二)

一め圃 二三③道のへにしも名をとどめけり 𠄎

cf. み——

とどめおく(留置)(動四)

一く圃 二三⑬心計はとどめをくらむ 𠄎

とびちがふ(飛達)(動四)

一ふ圃 四⑧をしかものうちむれてとびちがふさま

とふ(訪)(動四)

一ふ圃 五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ

とふ(問)(動四)

一ふ圃 一八⑦雲にあととふ佐夜の中山 𠄎

とぶらふ(訪)(動四)

一ひ圃 三二⑨月をのづから祇宗の観をとぶらひ行法座をか

とほし(遠)(形)

一から圃 六①はかなく移る月日なれば遠からずおほゆ

二一⑧此庵のあたり幾程遠からず峠と云所にいたり

て

二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり

二六⑬海の渚遠からず松はるかに生わたりて

四⑤南には池のおもて遠く見えわたる

七⑧二千里の外の古人の心遠く思ひやられて

八⑩雪のつもれるやうに見えて遠く白きものから

九⑭古郷は日へて遠くなるみかた 𠄎

一四④其間に洲崎遠くさし出て松きびしく生つどき

一七⑤しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて

二六④南は海のおもて遠くみわたされて

一⑩はるく遠き旅なれども雲をしのぎ霧を分つ

五⑨行末とをきたびの空思ひつゞけられて

六⑦すゑ遠き道なれども立さらん事はものうくて

一五⑨ すす遠き野原なればつくぐとながめゆくは  
どに

とは 圓辭み

二七④ 見渡せは千本の松の末遠みどりにつくく波

のうへ哉 圓

とほたふみ (遠江) 《名》

一三⑫ 参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

一七⑬ 遠江の国府いまの浦につきぬ

とほたふみのくに (遠江国) 《名》

三一⑭ 本は遠江の国の人定光上人といふ

とほる (通) 《動四》

cf. うち—

とまびさし (菩提) 《名》

二七⑩ 是そこのつりする海士の菩提 圓

とまり (止・泊) 《名》

一⑬ 或は山館野亭の夜のとまり

とまる (止・泊・留) 《動四》

一ら 圓 四⑫ 行人もとまらぬ里となりしより 圓

一七⑦ 是も心とまらずしもあらざらましなどはおほ

えて

三二⑪ 心とまらずしもはなれども文にもくらく

一り 圓 四⑨ この宿にこそとまりけるが今はうちすぐるた

ぐひのみ多くして

五⑥ むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

七⑥ くるせ川と云所にとまりて夜更るほどに川端  
に立出てみれば

九③ 劍は熱田にとまり給ふともいへり

一〇⑬ とまりける女のもとにつかはしける歌に

一四⑪ さても此宿に一夜とまりたりしやどあり

一八⑩ 東へくだられけるに此宿にとまりけるが

二一⑩ 心とまりておほゆればそのかたはらにかきつ

けし

二九② 此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば

三一⑦ 殊に心とまりてみゆ

一 圓 一四⑥ 心とまるふしぐをかき置て

一四⑥ 行く人心をいたましめとまるたぐひ夢をさま

さすといふ事なし

cf. たち—・ゆき—

とみ (頓) 《副》

三三⑧ はからざるにとみの事ありて都へかへるべき

になりぬ

とむ (止・留) 《動下二》

一 圓 一 圓 二⑪ 心をとむる相坂の関 圓

ども 《接尾》

cf. うた—・かはせ—・きみ—・こと—・ふね—

ともがら (輩) 《名》

一一⑬ 古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれ

たる

二二⑫ これを見む輩皆かの召公を忍びけん  
ともなしちどり (友無千鳥) (名)

九⑪ 友なし千鳥ときくをとづれわたれる  
ともなふ (伴) (動四)

一ひ圃 二二⑨ 民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行け  
るが

ともに (共) (連語)

一一⑩ 草土ともに蒼茫たり

二〇⑪ 難行苦行の二の道ともにかけたりといへども

二五⑤ かれもこれもともに心すみておぼゆ

とよかは (豊河) (名)

一三③ 豊河と云宿の前をうち過るに

一三⑩ 覺東ないさ豊河のかはる瀬を 園

とり (鳥) (名)

二六③ むれたる鳥おほくさはぎたり

of. ゆふつけ

とりあふ (取致) (動下二)

一八⑧ 二九⑨ 雨俄にふりてみかさもととりあへぬほど也

とりいづ (取出) (動下二)

一で圃 一九⑬ かれいゝなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞき  
わたりて

とりて (連語)

三二⑧ 末代にとりてはこれも不思議といひつべし

とりどりなり (形動)

一に圃 二六⑥ こなたかなたの眺望いつれもとりとく心に心ば  
そし

とる (取) (動四)

一り圃 二〇⑭ むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の藤をと  
り

とをかあまり (十余日) (名)

一⑫ 終に十余の日数をへて

な

な (名) (名)

三⑧ 名のみ残れるしかのふる郷 園

六③ 名にしおいその杜の下草 園

二二④ 是も又ふるきつかとなりなば名だにも残らじ  
とあはれ也

えける

二二⑥ 武勇三略の名を得たりかたはらに人なくぞみ

えける

二二三③ 道のへにしも名をとゞめけり 園

なか (中) (名)

四⑧ あしかつみなどおひわたれる中に

五① 老をいとひてよみける歌の中に

八⑩ 物にふれて神さびたる中にも

一一⑪ 茂れるさく原の中にあまたふみわけたる道あ  
りて

りて

一四⑬ 君どもあまたみえし中に

一九⑥遙々とひろき河原の中に一すぢならず流わか  
れたる川瀬ども

二〇⑫山の中に眠れるは

二一⑨歌どもあまた書付たる中に東路はこゝをせに  
せん

二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたゝへり  
三〇⑭今繁昌の地となれり中にも鶴岡の若宮は

ながし(永・長)《形》

—き囿

四④西東へ遙にながき堤あり

二六②西東へはるゝとながき沼あり布をひけるが  
ごとし

ながす(流)《動四》

—し囿 二三⑪民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり

cf. かきながしがたし

なかなか(中々)《副》

一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろくお  
ほゆれば

ほゆれば

二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし

なかなかなり(中々)《形動》

—に囿 七④いやしきことの葉をのこさんも中中におぼえ  
て

なかば(半)《名》

一①齡は百とせの半に近づきて

七⑬しらさき秋の半の今宵しも 歌

三二⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり  
ながはし(長橋)《名》

cf. せたの—

なかみかどのちゅうなごん(中御門中納言)《名》

一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人

ながめ(眺)《名》

二六⑤雲の波煙の浪いとふかきながめなり

三〇⑦ひとつなかめの沖のつり舟 歌

ながむ(眺)《動下二》

—め囿 三⑬なかめし跡を又そなかむる 歌

—むる囿 三⑬なかめし跡を又そなかむる 歌

cf. うち—

ながめやる(眺遣)《動四》

—る囿 三三④つくづくと都のかたをながめやる折しも

ながめゆく(眺行)《動四》

—く囿 一五⑨つくづくとながめゆくほどに

なかやま(中山)《名》

cf. さよの—

ながる(流)《動下二》

—れ囿 一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねど  
も

—る囿 六⑨道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ

たちとまりつれ 歌

ながれ(流)《名》

一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことくしくきこゆ

一六⑧川ふかく流れはげしくみゆ

一六⑫彼巫峡の水の流おもひよせられて

一六⑬しづかなる流ぞかしとおもふにも

一七①此河のはやき流も世中の 歌

ながれいづ (流出) (動下二)

―づる 困 六④陰くらき木のしたのいはねより流出る清水

ながれく (流来) (動力変)

―き 困 二八④せきかけし苗代水の流きて 歌

ながれわかる (流分) (動下二)

―れ 困 一九⑥一すぢならず流わかれたる川瀬ども

なきさ (落) (名)

一五⑥北南は砂々とはるかにして西は海の渚近し

二六⑬海の渚遠からず松はるかに生わたりて

なく (鳴) (動四)

―き 困 三三⑦なきてや夜の空に出にし 歌

なくさむ (慰) (動四)

―む 困 三〇③つれづれもなくさむやとて

なくさめ (慰) (名)

二二②柴折くぶるなくさめまでも思ひたえたるさま

なり

なごり (名残) (名)

一四⑦朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし

一五④なごりおほくおぼえながら此宿をもうち出て  
行過るほどに

一七⑥名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる

一七⑩昨日の里の名残をそきく 歌

三四③さすかなごりのおしき宿哉 歌

おん― 二八②たちまちに緑にかへりけるあら人神の御なご

りなれば

なさけ (情) (名)

一五②言のはの深き情は軒端もる 歌

なし (無) (形)

―から 困 一七⑦昨日のめうつりなからずは是も心とまらずし

もあらざらまし

―かり 困 一三④此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

一九②かきつくるかたみも今はなかりけり 歌

二四⑤さらにまどろむ間だになかりつる草の枕のま

ろぶしなれば

―く 困 一②なすことなくして徒にあかしくらすのみにあ

らず

九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし 歌

一〇⑩かの草とおぼしき物はなくていねのみぞおほ

くみゆる

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

二二⑥かたはらに人なくぞみえける



二九⑩聞ゆる所々をも見とゞむるひまもなくてうち  
過ぬること

―し田

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし  
一四⑥とまるたぐひ夢をさまざといふ事なし

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二六⑤すべて孤嶋の眼に遮るなし

二六⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

二九⑬前は道にむかひて門なし

三一②蘋蘩のそなへかくることなし

―き囀

六⑫しはしすゝまぬ旅人そなき 囀  
一三①植置しぬしなき跡の柳はら 囀

一六⑬たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき  
習ひ也

二四⑥寢覚ともなき晝の空に出ぬ

二四⑧かひなき心ちしてほすまもなき袖のしづくま  
では

二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の 囀

三二⑫つるにすみはつべきよすがもなきかずならぬ  
身なれば

―けれ田

一一⑬いまだ陰とたのむまではなけれども  
二〇⑩其身堪たるかたなければ理を観するに心くら  
く

二四⑦沖津風はげしきにうちよする波もひまなけれ  
ば

三二⑪心とまらずしもはなけれども文にもくらく武  
にもかけて

―かれ田 二⑧州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝこ  
となかれ

cf. あと―・かひ―・きはまり―・くもり―・たぐ  
ひ―・はか―

なす(成・為)《動四》

―す田 一二⑧州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝこ  
となかれ

―す囀 一①なすことなくて徒にあかしくらすのみにあ  
らず

なだかし(名高)《形》

―く田 三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずお  
ぼゆ

―き囀 一八①名高き名所なりとは聞きたれども  
なだむ(宥)《動下二》

―め囀 一二④おもき罪をもなだめけり

なつ(夏)《名》

一九⑭夏のまゝなる旅ごろもうすき杖もさむくおぼ  
ゆ

なづく(名付)《動下二》

―け田 二⑨此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり  
一六⑧天竜と名付たるわたりあり川ふかく流れはげ  
しくみゆ

二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にもをのづから神仙

の

一四⑦みづうみにわたせる橋を浜名となづく

二八⑧箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり

なづむ(泥)〔動四〕

一む困 二八⑦駒もなづむばかり也

なな(七)〔名〕

四⑭鏡の宿にいたりぬれば昔々の翁のよりあひ

つゝ

なに(何)〔名〕

二二⑬よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはな

にゝかはせん 〔歌〕

なにかし(某)〔名〕

二九⑫なにかしのいりとかやいふ所に

なほしるみづ(苗代水)〔名〕

二八④せきかけし苗代水の流きて 〔歌〕

なびかす(靡)〔動四〕

一す困三〇⑫義兵をあげて朝敵をなびかすより

なべて〔副〕

二五⑨なべていまだ白妙にはあらず青して天によれ

なほ(猶)〔副〕

二四④遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでら

る

五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ

一三②猶その陰を人やたのまん 〔歌〕

一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所

あり

二〇⑭むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の靡をと

り

二二⑭猶うちすぐるほどにある木陰に石をたかくつ

みあげて

二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに

なまじひに(生強)〔副〕

一⑦恐に都のほとりに住居つゝ

なみ(波・浪)〔名〕

四⑥波の色もひとつになり南山の影をひたさねど

も

一〇③波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに

見ゆ

一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことトしくきこ

ゆ

一四③南には潮海あり漁舟波にうかぶ北には湖水有

一四⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし

一七⑤南には極浦の波袖を湿し北には長松の嵐心を

いたましむ

一七⑨浪の昔も松の嵐もいまの浦に 〔歌〕

二三⑤沖の石村々塩干にあらはれて波に咽び

二三⑩ 漁舟の火のかけは寒くして浪を焼

二四① いそべによする波の音も身のうへにかゝるや

うにおぼえて

二四④ かけぬ浪にも袖はぬれけり 歌

二四⑦ 沖津風はげしきにうちよする波もひまなけれ

ば

二六④ 雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二六⑤ 雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二七⑤ みとりにつゝく波のうへ哉 歌

二八⑩ 巖室石龜の波にのぞめるかけ銭塘の水心寺と

もいひつべし

二九③ 谷川みなぎりまさり岩瀬の波高くむせぶ

cf. ささぎ——しら——

なみだ(涙)《名》

一〇⑧ みな人かれないのうへになみだおとしける所

よと

一〇⑩ 花ゆへにおちし涙のかたみとや 歌

一八④ 雲に分入心地して鹿の音なみだをもよほし

二二⑤ 心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ

二三⑩ 民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり

二九④ かの源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをと

かなといへる

なみぢ(波路)《名》

一〇⑥ 明行末は波路なりけり 歌

なみま(波間)《名》

三〇⑧ 玉よする三浦かさぎの波まより 歌

なみわけごろも(浪分衣)《名》

二四⑫ 浪わけ衣ぬれくそ行 歌

ならひ(習)《名》

四⑩ かはりゆく世のならひ飛鳥の河の淵瀬に

一三⑥ ふるきをすててあたらしきにつくならひまだ

まれることいひながら

一六⑭ たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき

習ひ也

一八⑭ かたみさへあとなくなりけるこそはかなき

世のならひいとゞあはれにかなしけれ

ならびまふ(並舞)《動四》

一ふ⑭ 二五⑩ 白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と都

ならぶ(並)《動下二》 良香が富士の山の記に書たり

一ふ⑭ 三一⑧ 禅僧庵をならぶ月をのづから祇宗の観をとぶ

らひ

なりひら(業平)《名》

二〇④ かの業平がす行者にことづてしけん程はいづ

くなるらん

なりまさる(成増)《動四》

一れ⑭ 三三③ 松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしくなり

まされる

なりゆく (成行) (動四)

― 四 ⑩ 家居もまばらに成行など聞こそ

なる (成・為) (動四)

― 一 四 ⑨ 曙の空になりてせたの長橋うち渡すほどに

― 四 ⑥ 波の色もひとつになり南山の影をひたさねども

も

― 四 ⑫ 行人もとまらぬ里となりしより 歌

― 九 ③ 尊は白鳥となりて去給ふ

― 一 八 ⑭ 今は限とてのこし置けむかたみさへあとなく

なりにけるこそはかなき世のならひ

― 二 二 ② 道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも

― 二 二 ④ 是も又ふるまつかとなりなば名だにも残らじ

とあはれ也

― 二 二 ⑧ たちまちに身をほろぼすべきになりければ

― 二 三 ⑥ 東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也

― 三 二 ④ 仏はすなはち両三年の功すみやかに

― 三 三 ⑭ むなしく過行て秋より冬にもなりぬ

― 三 三 ⑨ とみの事ありて都へかへるべきになりぬ

― 一 六 ⑭ 古郷は日をへて遠くなるみかた 歌

― 一 六 ⑩ 底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ

― 二 ① をのづから後のかたみにもなれとてなり

― 一 一 ⑭ かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり

― 三 〇 ⑭ そのみぎりにあがめ奉るよりこのかた今繁昌

の地となれり

なる (慣・馴) (動二)

― 一 九 ⑨ 三 四 ② なれぬれば都を急く今朝なれと 歌

cf. きき

― 九 ⑭ 古郷は日をへて遠くなるみかた 歌

― 二 〇 ⑩ 難行苦行の二の道ともにかけたりといへども

なんぎやうくきやう (難行苦行) (名)

なんざん (南山) (名)

― 四 ⑥ 南山の影をひたさねども青くして泥濘たり

なんやうけん (南陽県) (名)

― 一 八 ⑩ 昔は南陽県の菊水 downstream を渡で齡をのぶ

に

― 三 一 ⑤ 二階堂はことにすぐれたる寺也

にくし (憎) (形)

cf. ところ

― 一 〇 ⑩ 濁 (動四)

― 一 〇 ⑥ 世をいとふ心のおくや濁らまし 歌

にし (西) (名)

― 一 二 ② 狭のにしのかたを治し時ひとつの甘棠のもと

― 一 五 ⑤ 北南は眇々とほるかにして西は海の渚近し

にしき(錦)《名》

三三⑩錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらね

ども

三三⑬おもはぬほかの錦をやきむ 歌

にしひがし(西東)《名》

四④西東へ遥にながき堤あり

二六①北はふじの麓にて西東へはるくとながき沼

あり

にせんり(二千里)《名》

七⑧二千里の外の古人の心遠く思ひやられて

にだい(二代)《名》

二二⑥かの梶原は將軍二代の恩に橋り

には(庭)《名》

二七⑬庭の気色も神さびわたれり

にはかなり(俄)《形動》

一三④近比より俄にわたふ津の今道と云かたに

二八①炎早の天よりあめにはかにふりて

二九⑧鎌倉につく日の夕つかた雨俄にふりて

にる(似)《動上二》

一③彼白楽天の身は浮雲に似たり首は霜ににたり

と書給へる

一④首は霜ににたりと書給へる

一五⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり

一九⑧すながしといふ物をしたるににたり

cf. あひ——

にんげん(任限)《名》

九⑥吾願已にみちぬ任限又みちたり

にんこく(任国)《名》

一二⑦学士実政任国に赴く時

にんちさんねん(仁治三年)《名》

一⑨おもはぬ外に仁治三年の秋八月十日あまりの

比

ぬ

ぬし(主)《名》

一三①植置しぬしなき跡の柳はら 歌

ぬの(布)《名》

二六②西東へはるくとながき沼あり布をひけるが

ごとし

ぬま(沼)《名》

二六②北はふじの麓にて西東へはるくとながき沼

あり

二六①影ひたす沼の入えにふしのねの 歌

ぬる(濡)《動下二》

一れ 二四④かけぬ浪にも袖はぬれけり 歌

ぬれぬれ《副》

二四⑫浪わけ衣ぬれくそ行 歌

ね

ね (音) (名)

一八④雲に分入心地して鹿の音なみだをもよほし

三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

三三②聞なれし虫の音もやよはりはてて

cf. かりが

ね (嶺) (名)

cf. ふじの

ねがひ (願) (名)

九⑥供養をとげる願文に吾願已にみちぬ

ねぐら (埜) (名)

八⑩ねぐらあらそふ驚むらのかずもしらず梢にき

ゐるさま

ねざめ (寢覚) (名)

五⑨かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめもかくや有

けむと哀なり

二四⑥草の枕のまろぶしなれば寢覚ともなき曉の空

に出ぬ

ねむる (眠) (動四)

一れ⑩二〇⑫山の中に眠れるは里にありて動たるにまされ

るよし

ねんず (念) (動サ変)

一ずる⑩二〇⑫理を觀するに心くらく仏を念ずるに性ものう

し

の

のついにふだう (能因入道) (名)

二七⑭能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて奉

りけるに

のき (軒) (名)

一四⑫軒ふりたるわらやのころろくまばらなるひ

まより

のきば (軒端) (名)

一五⑫言のはの深き情は軒端もる 歌

のこしおく (残置) (動四)

一き⑩ 一八⑬今は限とてのこし置けむかたみさへあとなく

なりにけるこそ

一く⑫ 一〇⑫稲葉の露を残しをくらん 歌

のこす (残) (動四)

一さ⑩ 七④いやしきことの葉をのこさんも中におぼえ

て

のこる (残) (動四)

一ら⑩ 一八⑫かの言のはものこらずと申ものあり

二二④名だにも残らじとあはれ也

二七⑫いとふありかや袖にのこらん 歌

一れ⑩ 三⑧名のみ残れるしかのふる郷 歌

のぞみ (望) (名)

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし  
 一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

のぞむ(望) (動四)

—み圃

三⑩かの満誓沙弥が比叡山にて此海を望つゝよめ  
 りけん歌

二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

—む圃

二六⑥遠帆の空につらなれるをのぞむ  
 二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

—む圃

一五⑫一とせ望むことありて鎌倉へくだる筑紫人有  
 けり

一六①鎌倉にて望むことかなひけるによりて

三三⑤堂は又十二楼のかまへ望むにたかし

三三⑩錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらね  
 ども

—め圃

二八⑪巖室石龜の波にのぞめるかげ

のち(後) (名)

二①をのづから後のかたみにもなれとてなり

七②後京極摂政殿の荒にしのはたゝ秋の風とよ  
 ませ給へる歌

八⑭其後景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へ  
 りとゝへり

二二⑬よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはな  
 にゝかはせん 歌

のぢ(野路) (名)

三⑭このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ  
 四②東路の野ちの朝露けふやさは 歌

のぢのしのはら (野路篠原) (名)

四⑬荒のみまさるのちの篠原 歌

ののしりあふ (属合) (動四)

—へ圃 八②里もひゞくばかりにのゝしりあへり

のはら (野原) (名)

一五⑨すゑ遠き野原なればつくぐとながめゆくほ  
 どに

cf. かさはらの—

のぶ(延) (動上二)

—び圃 二二⑧ひとまどものびんとやおもひけむ

のぶ(延) (動下二)

—ぶ圃 一八⑩昔は南陽県の菊水 downstream を汲で齡をのぶ

のぶ(述) (動下二)

—べ圃 二⑦大和歌を詠じておもひを述けり

のほる(上) (動四)

cf. うち—はせ—

のやま(野山) (名)

一八③南は野山にて秋の花露しげし

のり(法) (名)

九⑩法の形見をたむけをかすは 歌